

ミシェル・ド・クレツァー『旅の問いかけ』における 他者との出会い

佐藤 渉

はじめに

オーストラリアの作家ミシェル・ド・クレツァーの小説『旅の問いかけ』(Michelle de Kretser, *Questions of Travel*, 2012) は、国境を越えて移動する二人の主人公の願望と経験を通して私たちがどんな時代に生きているのかを問う同時代小説である。この小説には、オーストラリア出身のローラ・フレイザーの章と、スリランカ出身のラヴィ・メンディスの章がおおむね交互に配置され、1960年代から2004年まで二人の人生をたどるという構成になっている。作品の舞台は二人の故郷であるオーストラリアとスリランカを中心に、ローラが訪問あるいは長期滞在するインドネシア、インド、イギリス、イタリアなど世界各地に及んでいる。ローラは叔母から遺産を相続し、ヨーロッパを中心に世界を巡った後、シドニーに帰還する。ラヴィはNGOで働く活動家の妻と息子を何者かに殺害された後、観光ビザでシドニーに渡航し庇護を求める。小説は二部構成となっており、第一部ではローラの海外遍歴とスリランカでのラヴィの暮らしが描かれ、第二部ではシドニーの旅行ガイドブック出版社で働き始めた二人の主人公が出会う。ローラがみずからの選択によって自由に国境を越えて旅するグローバルトラベラーであるのに対し、ラヴィは生命の危険から逃れるため離国する庇護希望者である。このように旅立つ理由も条件も大きく異なる二人の「旅」を並置することで、多面的で多義的な現代の旅が浮かび上がる構図となっている¹⁾。

作者のミシェル・ド・クレツァーは1957年にスリランカで生まれ、1972年に14歳でメルボルンに移住した²⁾。メルボルンとパリで学んだ後、旅行ガイドブックで知られるロンリープラネットの編集者としてパリで10年過ごし、現在はシドニーで暮らす。ド・クレツァーはこれまでに中編を含む7冊の小説作品を発表しており、第4作となる本書と2017年出版の第6作 *The Life to Come* でオーストラリア最高峰の文学賞と目されているマイルズ・フランクリン賞をそれぞれ受賞している。風刺の効いた軽やかな文体を特徴とする彼女の作品は、人間心理に鋭く切り込み、時代性を鮮やかに描き出す。

『旅の問いかけ』に一貫したプロットは存在しないが、タイトルが端的に示しているように主要モチーフは旅である。本作品にはローラ・フレイザーとラヴィ・メンディスを中心にさまざまな旅人が登場し、旅をする理由、移民とホスト社会の人々の心理、帰属意識などが問われる。祖国との精神的絆と新たな定住国との心の距離は、それぞれの登場人物が離国した背景や新天地に何を求めるかによっておのずと異なる。世界各地を舞台とし、多様な帰属意識のあり方を描いているという意味において、本小説をコスモポリタン小説と呼んで差し支えないだろう³⁾。社会学者の鈴木弥香子は新しいコスモポリタニズムを論じて、「よりよい共生のための新たな連帯」を見出していくために「『いま』『ここ』が、遠くの場所や他者に結び付いている、という複数的で多元的な愛着／帰属のあり方を考えることこそが重要なのである」と述べている(鈴木2017, 246)。『旅の問いかけ』

はまさしく主人公の「いま」「ここ」が思いがけない場所や他者と結びついている、あるいは結びついていくさまを描いた小説である。ゆえに、この作品を読むことはナショナルな想像力を超えた「コスモポリタンな想像力」(塩原 31-2)を培うレッスンとなるだろう。

本稿では、テキストに記された断片的な情報を手掛かりに作品に登場する移民の経験を再文脈化すること、そして移民とホスト社会の人々の接触場面で双方の心理に何が起きているのかを明らかにすることを目的とする。ラヴィを始め、本作品に登場するスリランカ移民のバックグラウンドは必ずしも明らかではない。そこで本稿では、まずスリランカの民族構成と近現代史を概観した上で、歴史的・社会的文脈を踏まえてスリランカ移民のバックグラウンドを探る。さらに、移民とホスト社会の構成員が出会う場面に着目し、それぞれが抱く他者との境界線や偏見を明らかにする。

1. ラヴィの民族的背景

まず、ラヴィの章の背景となっているスリランカの民族構成と近現代史に触れておく。スリランカは多民族国家であり、2012年の国勢調査によるとシンハラ人が74.9%、タミル人が15.3%、スリランカ・ムーア人が9.3%を占めている⁴⁾。タミル人はさらに、紀元前に南インドから移住したとされるスリランカ・タミルと、英国植民地時代にプランテーション労働者として強制移住させられたインド・タミルという二つの集団に分かれる。これら主要民族に加え、スリランカにはバーガー人と呼ばれる民族グループが存在する。バーガー人とはセイロンに移住したポルトガル人、オランダ人、イギリス人などヨーロッパ系入植者と、現地人女性の子孫を指す名称であり、人口に占める割合は0.5%に満たない。バーガー人は西洋式の生活様式とキリスト教信仰を保ち、英語話者が多いことを特徴としている。イギリス統治下のセイロンでバーガー人は英語話者となり、行政職や専門職に就いてミドルクラスを形成した⁵⁾。なお1987年の憲法改正によりスリランカの公用語はシンハラ語とタミル語と定められているが、連結語として英語も使用されている。

スリランカにはヨーロッパ列強が相次いで進出し、400年余りにわたる植民地支配が続いた。まず16世紀初めにポルトガル領となり、17世紀にはオランダ領、1815年から1948年まではイギリス領セイロンとなった。イギリスは植民地経営の方針として、少数派のタミル人を優遇する分割統治を採用した。1948年にイギリス連邦内の自治領としてセイロンが独立すると、多数派のシンハラ人が政権を掌握し、やがてシンハラ・オンリー政策を推進していくことになる。1956年にSinhala Only Actとして知られる「公用語法」が制定され、シンハラ語が唯一の公用語となり、連結語あるいは教育機関での教授言語としての英語が駆逐されていく。こうしたシンハラ・ナショナリズムに対抗して、タミル人の分離独立運動が活発化する。1983年にはタミル人武装組織「タミル・イーラム解放のトラ」(LTTE)が政府軍兵士を襲撃する事件が発生し、スリランカは長期にわたる激しい内戦に突入する。政府軍がLTTEの支配地域を制圧し、内戦終結が宣言されたのは2009年のことである。『旅の問いかけ』に登場するスリランカ移民が祖国を離れるおもな理由は、植民地統治に由来する民族対立である。

ローラとラヴィの境遇は大きく異なっているが、二人には歴史的な共通点がある。すなわち、どちらも旧英国植民地の出身であり、少なくとも部分的には入植者の子孫であるという事実である。ローラの祖先はイギリスからの移民であり、ラヴィの母方の祖先はイタリアからの移民である。ラ

ヴィの祖先についてテキストには次のように記されている。

クック船長がケアラケクア湾で落命した一七七九年のあの日、ロッテルダムでオランダ東インド会社所有の船に乗りこんだイタリア人薬剤師がゴールに到着した。一人はすでに名声を得ており、もう一人は無名のまま死んでいくことになるのだが、どちらの人物も欲望と好奇心、そしてじっとしていることに耐えられない人間の性に突き動かされて地球規模の大事業に携わっていたという点で共通していた。

ラヴィの家系を二百年遡ると、そのイタリア人冒険家につながっていた。しかしそれは母方の家系であり、したがって重要ではなかった。(『旅の問いかけ』25)⁶⁾

ジェームズ・クックはエンデバー号を率いてオーストラリア大陸に到達し、東岸一帯のイギリスによる領有を宣言した人物である。この引用部により植民地主義という補助線が引かれ、オーストラリアとスリランカが結びつく。本小説では現代のさまざまな旅が吟味されるが、クックのような航海者やヨーロッパの宗主国から植民地に渡った人びとも広い意味での旅人と見なすことができる。彼らの旅が現代世界の成り立ちに非常に大きな影響を及ぼしていることは言うまでもない。作者は小説の冒頭近くにこのパラグラフを置くことで、現代の旅を問う作品に歴史という参照軸を導入している。

スリランカにおける法的なバーガー人の定義は父系に限られている。したがって、母方にイタリア人の祖先がいるものの、定義上ラヴィはバーガー人ではない。事実、第二部でラヴィを支援する弁護士が「あなたのようなシンハラ人の申請は例外的なのよ」(288)と口にしており、ラヴィのエスニック・アイデンティティがシンハラ人であることがわかる。ただし、それはあくまで公式の定義に基づくアイデンティティであり、ラヴィの家庭の実態は別途確認しておく必要がある。

『旅の問いかけ』にはメンディス家の言語使用に関して興味深い一節がある。

メンディス家では家の中では英語を話すしきたりだった。ところが今、ラヴィはカーメルに対してシンハラ語で嘔みつくように言った。僕たちの結婚に対する母さんの異議なんて屁でもない。カーメルの血は煮えくり返った。「お父さんのことを考えてみなさい！」と叫び、ナイロン製のバラに囲まれた写真立てのほうに顎をしゃくった。そこには、カーメルの夫がわずか三人の同僚を挟んで副大臣と並んでいた。(109)

メンディス家では日常的に英語が使用されているが、シンハラ語話者でもあることがうかがえる。英語使用に加え、ラヴィの母親がキリスト教徒であることや少年時代のラヴィがミッションスクールに通っていたことから、ラヴィは母親を介してバーガーの伝統を受け継いでいると考えられる。この場面でラヴィがシンハラ語を使用したのは母親の権威に対抗するためであり、母親が腹をたてたのは彼女が英語話者であることに誇りを持っているからであろう⁷⁾。父親の背景には触れられていないが、飾られている写真やメンディス家の暮らしぶりから推測すると、英語教育を受けたシンハラ人の下級官吏ではないだろうか。バーガー人の伝統を受け継ぎつつもシンハラ人であるラヴィが、民族対立を理由に海外に移住する必然性はなかった。しかし、妻子が殺害された事件を契機に、ラヴィは海外に脱出することになるのである。

2. ローラが出会ったスリランカ人

次に、イギリスで暮らすローラが出会ったスリランカ人男性と彼の家族のバックグラウンドを検証する。コミュニティーセンターのワープロ講座を受講していたローラは、スリランカ出身の寡黙な白髪の男性と出会う。彼の家族と思しき若い女性と彼女の息子は、同じコミュニティーセンターの初級英語講座を受講している。ローラは、この女性が白髪の男性の娘だろうと見当をつけていたが、実は妻であることが明かされる。

次に口を開いたとき、彼は言った。「あの女は私の妻だ。男の子は彼女の息子」

「あら、そうよね」

しばらく、二人ともローラの見えすいた嘘について考えていた。ローラ・フレイザーの清教徒的な若い魂は、二人の年の差に大きなショックを受けていた。

男は上着の袖をたくしあげていた。青いフランネルシャツの袖口からのぞいている骨ばった手首は、白い毛に覆われていた。彼女は、その手が年若い女の甘美な肉体をまさぐっているのを想像した。

しかし、残酷さにおいて彼はローラの相手ではなかった。「妻が十二歳のとき、彼女の村に兵士たちがやってきた。あの子の父親はそのときの兵士の一人だ」(117)

この女性は、内戦下のスリランカでシンハラ人兵士によって乱暴されたタミル人であろう。彼女がタミル人であることは、ヒンドゥー教徒の既婚女性を示すビンディを額につけていることからもうかがえる。彼女は民族対立が原因で祖国を離れざるを得なくなった人たちの一人である。この男性によると、彼らはカトリックの慈善団体の支援を受けてイギリスに渡ってきたという。

名前も含め、白髪の男性の身元は明かされていない。それでも断片的な情報をつなぎ合わせると、ある人物との共通点が浮かび上がる。それはラヴィが通っていたミッションスクールで地理を教えていたイグナティウス修道士である。少年時代のラヴィはイグナティウス修道士が使用していた巻き上げ式の世界地図に強く惹かれていた。「歴史とは地理の副産物に過ぎ」ないが「地理は宿命」であり「太古から存在し、鉄のようにゆるぎない」(28-29)と生徒たちに語るイグナティウス修道士は、ラヴィの心に世界への憧れを植えつけた人物である。イグナティウス修道士の言葉は、地理的な移動と歴史との関係性というテーマを導入している。

ローラが出会ったスリランカ人男性とイグナティウス修道士を結びつける一つ目の手がかりは、ナラボー平原への言及である。ローラがオーストラリア出身だと聞かされた白髪の男性は、ナラボー平原を見てみたいと口にする(115)。実はラヴィの二つ目の章で、イグナティウス修道士が授業中にゾイデル海、ナラボー平原、マレー多島海についてメモを見ずに語ったというくだりがある(29)。二つ目の手がかりは、成人したラヴィが学校の用務員から聞いた消息である。イグナティウス修道士が学校を辞めて東部の難民キャンプに向かったこと、そして修道士とキャンプの女性のあいだに何らかの関係があるという仄めかしをラヴィは聞かされる(108)。東部はタミル人の比率が高い地域である。

イグナティウス修道士はヨーロッパ人と内陸生まれのタミル人との混血で、tea bush と呼ばれ

るもっとも蔑むべき存在だったと記されている。内陸生まれのタミル人とは比較的新しい移民であるインド・タミルの人々を指していると思われる。前節で述べたように、インド・タミルとはイギリス統治下で茶のプランテーション労働者としてインド南部からセイロンに移住させられた人々とその子孫を指す。同胞であるタミル人を支援するためキャンプに赴いたイグナティウス修道士が、兵士に乱暴されて子を産んだ女性を救おうとしたという成り行きも考えられよう。そう考えると、カトリックの慈善団体とのつながりも見えてくる。ローラが出会った男性が名前すら明かさないので、こうした過去を封印しようとしているからかもしれない。いずれにせよ、イグナティウス修道士の出自と、ローラが出会った人物が祖国を去ることになった背景に、イギリスによる植民地支配がかかわっていたことは確かである。イグナティウス修道士と思われる人物、ラヴィ、そして(部分的に)ローラは旧大英帝国の版図の中を移動している。この人物も、ラヴィとローラをつないでいる歴史の糸に連なっているのである。

3. 移民の中の境界線

この小説の第二部はラヴィがシドニーに渡航し、ローラが長期滞在先のイギリスから帰国した2000年から始まっている。ローラはシドニーオリンピックの中継で同胞がハワード首相にブーイングを浴びせるのを見て帰国を決意する。一方、ラヴィはスリランカのオーストラリア大使館に勤める男のサディスティックな欲望を満たすことで観光ビザを入手し、シドニーへの渡航を果たす。

2000年に開催されたシドニーオリンピックの開会式では多文化共生が強調され、セトラーの末裔と先住民の和解が演出された。一方で当時の連邦首相ジョン・ハワードは、多文化主義の推進に消極的で、植民地化の過程における先住民迫害の歴史を「黒い喪章史観」とみなして否定する立場をとっていた⁸⁾。また、当時はオーストラリア政府の「ボートピープル」への対応が国内外で注目を集めていた時期でもあった。不法移民を南太平洋の島嶼国に移送して難民認定審査を行うパシフィック・ソリューションが導入されたのは2001年のことである⁹⁾。第二部の始まりが、多文化主義の評価、歴史解釈、そして国境管理をめぐるオーストラリアが割れていた時期に設定されているのは、作者の意図的な選択だったと考えて間違いない。ラヴィが難民認定申請のため入国したオーストラリアは、誰がオーストラリア市民としてのぞましいのかという問いをめぐる大きく揺れていたのである。実際に第二部では、ホスト社会の構成員が移民に対して抱いている期待や誤解、善意の背後に潜む偏見などが浮き彫りになる。それだけではなく、移民自身が祖国から持ち込んだ文化的偏狭さ、あるいは民族の境界線も暴露される。

シドニーに到着したラヴィは、難民認定申請を支援してくれる弁護士から、西オーストラリア州ポートヘッドランドの移民収容施設に自分と同姓同名のスリランカ人がいることを知らされる。その人物の妻はタミル人であり、夫婦は難民申請の審査結果を長期に渡って待ち続けているという。後にラヴィはこの夫婦の申請が却下されたことを知る。ラヴィは「自分と同名の人物が世界中をぐるぐる回って、彼とタミル人の妻が必要されているとは限らない場所にときどきたどり着いているのを想像せずにはいられなかった。」(359) もう一人のラヴィ・メンデイスの運命は、主人公ラヴィの運命であったかもしれない。居場所を失い、未来を他者の審判に委ねざるを得ない夫婦は、仕事や余暇で世界を飛び回っているローラ・フレイザーとは対照的な、グローバル化した世界の影の存

在と言える。

シドニーで暮らし始めたラヴィを通じて、移民が抱える境界線やシドニー市民が移民に向けるまなざしが浮かび上がる。ある日、ラヴィは母方の親戚にあたるパターノット家が催したパーティーに出席する。このパーティーにはシドニー在住のスリランカ移民が多数招かれている。ラヴィはパーティーの参加者によって過去が掘り返されることを心配し、「彼らは、スリランカですべての状況がもっとよかった時代を思い出そうとするだろう—彼らが国を去ったときに、そんな時代は終わっていたのだ」(476)と考えていたが、それは杞憂に終わる。

昔の話は出てこなかった—ゴシップと言え、すべてシドニーのスリランカ人のことだった。オーストラリア人は三人出席していた。誰かのガールフレンドが二人に義理の息子が一人。彼らはにっこり微笑んで、楽しんでいるから大丈夫、少なくとも気にしていないから、と伝えているようだった。(477)

ここで「オーストラリア人」と呼ばれているのは、ラヴィの考えるオーストラリア人すなわち「白人」たちである。では、このパーティーに集まっている「スリランカ人」はいったいどのような人たちなのか。パターノット一家は姓から判断しておそらくバーガー人である¹⁰⁾。祖国以来のつながりを感じさせるパーティーの雰囲気から、どうやらほかの参加者たちもバーガー人であると思われる。彼らが初期の移民であることは、パターノット家の当主であるデズモンドが人生の3分の2をオーストラリアで過ごしてきたという後の記述によって裏付けられる。

彼らと祖国との距離感、ゴシップの対象をオーストラリアに移住したスリランカ人=こちら側に来た人たちに限定していることにも表れている。彼らのスリランカへの思いは、時間と空間によって隔てられた「離れた愛着 (attachment at a distance)」(Stanton 2) と呼ぶのがふさわしい。パターノット家の部屋の壁にはスリランカの形をした真鍮製のトレイが輝いている。このトレイは、今は存在しない古きよきスリランカを象徴しているかのようである。パーティーの参加者たちは記憶の中のスリランカに生き続けているのだろう。

このパーティーでは、スリランカ人コミュニティ内の世代間の意識の差も浮き彫りになる。

ヘルスセンターの新人の足の専門医がマールの英語に敬意を表した。「オーストラリア人って私たちが何語を話すと思っているのかしら？」マールの甥がある店で働いていて、そこではスリランカからの最近の移民もまた雇われていた。この二人の男たちは、同じ国の出身者だから友だちになるだろうと思われていた。しかし新しく入ったほうの男は、指で米を食べるタミル人だった。ターニャはパターノット家の娘だが、ぴしゃりと言い放った。「それがどうしたっていうの、ママ？ 私たち今ではみんなオーストラリア人じゃないの」この部屋にいたオーストラリア人たちは、この発言を黙って聞いていた。ラヴィは、ターニャがこの発言をあべこべの方向に向かわせていることに気づいた。彼女が言いたかったのは、オーストラリアでは、みんなが単にスリランカ人だということ—バーガー人、シンハラ人、外科医も掃除夫もみんな同じだということだった。つまり移民は、歴史に対する地理の勝利ということだ。故郷ではあんな人たちには絶対話しかけないのよ。(477、強調原文)

民族的偏見は移民の中にも存在する。移民第一世代であるマールは、祖国における民族の境界線をオーストラリア移住後も保ち続けている。身体的には国境を越えていても、彼女には内なる境界線を越える意志と想像力が無い。一方、移民1.5世あるいは2世のターニャはオーストラリア人としてのアイデンティティを持っている。しかし、三人の「オーストラリア人」の沈黙は、ターニャの発言に必ずしも同意していないことを示唆している。

ここでラヴィは、ホスト社会が移民に向けるまなざし―出身国が同じ移民のあいだに存在する民族的・社会的・文化的個別性に注意を払わず一般化・単純化する傾向―を赤裸々に表現している。この認識は多文化社会オーストラリアの現実をある程度言い当てていると考えてよいだろう。こうしたまなざしと自己認識のあいだでなんとか折り合いをつけてながら生きている移住者は少なくないと思われる。

「故郷ではあんな人たちには絶対話しかけないのよ。」というセリフは、ラヴィが心を寄せているエチオピア出身の移民ハナが口にした言葉である。マルチカルチャラルフェスティバルを訪れていたハナは、ブースを出していたエチオピア出身の女性たちと言葉を交わした後、ラヴィにこの言葉を告げる。この短いセリフには移民が抱えている過去と現在のせめぎ合いが凝縮されている。ハナは祖国での階級意識を保持しながらも、身近な他者との境界線を越えようと努めている。それは彼女が「オーストラリア人」としてのアイデンティティを新たに構築しようとしているからである。

このように、パターノット家のパーティーでは民族の境界線と帰属を巡るそれぞれの思いが錯綜している。オーストラリアという場所には無数の流動的な境界線が存在し、見る者によってその位置が変わりもするのだ。

4. ホスト社会と移民のあいだの境界線

ホスト社会の人々が庇護希望者に対して抱いている不正確な認識も描かれている。ラヴィの同僚たちはラヴィが収容所に入っていたという前提で話しかけ、収容所に入っていなかったことを知るとラヴィは本当に難民なのかという疑念を口にする。難民はすべからず移民収容施設に収容されるという誤った認識には、当時のオーストラリア政府とメディアによるボートピープルのスティグマ化が影響していると考えられる。ラヴィの家主であるヘイゼル・コスティガンの息子たちも、ラヴィのステータスについて想像を巡らせる。

コルの誕生日を祝うためキャンプシーの中国料理店で飲茶のテーブルを囲みながら、ヘイゼルの息子たちは新しい間借り人について分析し、査定していた。

三男のラスは「誰か七チャンネルで放送している、移民審査の順番抜かしの番組を見たことあるか?」と言った。それから、「たしかにハワードは不快なクソ野郎さ。俺が言ってるのは、もしこのランカ出身の男が難民だったら、なんで施設に収容されないんだってことさ」と付け加えた。

ケヴは「奴が履いているリーボックは安くないぜ」と言った。

デイモは「彼の顔もね」と言った。(295、強調原文)

ラスには難民＝不法移民という認識が刷り込まれている。彼らの会話からは、ラヴィのように有効なヴィザを持ち、英語を自在に操り、飛行機に乗ってやってくる「エアピープル」はオーセンティックではない難民とみなされている状況がうかがえる。

コスティガン家の息子たちは、ラヴィがオーストラリアに渡航することになった経緯もリーボックを履いている理由も知らない。渡航前、ラヴィは亡き妻が働いていたNGOの重役であるスリランカ系イギリス人女性の庇護を受けていた。当時のラヴィは、妻子を殺害した正体不明の連中に居場所を特定されないよう、アメリカから祖国に一時帰国して観光を楽しんでいるスリランカ人離国者のふりをしてホテルを転々としていた。リーボックのスニーカーも変装用に渡されていたもので、ラヴィにとっては命がけの逃避行に必要なアイテムだったのである。

沈黙は必ずしも不在を意味するわけではない。ラヴィがそうであるように、あるいはローラが出会ったスリランカ人がそうであったように、祖国を逃れて海外に渡航した人々には語りたくない体験、あるいは語り得ない体験がある。

バンクシアガーデンでの最初の週に、「一体どうして、スリランカからわざわざここまでやってきたの？」とマンディに聞かれた。「政治的な理由？」少し間をおいてラヴィはそうだと答えた。政治と答えておけば、彼がオーストラリアに来た理由になるだろう。仕事場では、彼は過去のことをほとんど話さなかった。むしろカレー風味の鱈、モンスーン、海辺の青い家について話した。仕事仲間のほとんどは移民だった。故郷の思い出にふけるときには、誰もが食べ物や植物、子ども時代のこと、天気などに執着した。どこか別の場所で、心の中の踏み車だけかもしれないが、彼らがオーストラリアへ来ることになった理由を答える練習をしたのだとラヴィは思った。あるいは恐らくそんなふうにして記憶というものは、結局、政権を陵駕するということだ。一輪の花のほうが政治よりも重要であることを認めることによって。(400-401)

ラヴィの妻であるマリーニは、NGOのメンバーとして農村の生活改善に取り組みながら、政府および過激派組織の残虐行為を非難する演説活動を行っていた。マリーニの遺体は、胸の上と太もものあたりで切断され、胸の上の切り口には切り落とされた手足が詰め込まれ花瓶を連想させる姿に変えられていた。息子の遺体は路地裏で犬にかじられているところを発見された。移民審査官を前にした口頭審問でも、ラヴィは自身の体験を「首尾一貫した物語」(538)として語るができな。ラヴィは語り得ない体験を内に秘めて異国の地に立っているのである。こうした体験を語るよう移民に対して求めるのは、それ自体が暴力的な行為である。ラヴィの経験を通して、埋めがたいへだたりを抱えつつ多民族が同じ場所を共有して生きているオーストラリアの現実が浮かび上がってくる。

ラヴィの難民認定申請は3年に及ぶ審査と再審査を経てようやく認められる。しかしラヴィは「自分の国で旅行者になりたくない」(562)という理由でスリランカに帰国する道を選ぶ。この決断の背景には、妻子が殺害された日を境に過去と現在が断絶してしまい、もはや過去にしか生きていくことが出来ないという思いがある。ラヴィの胸中は、次に示す引用で詳しく語られている。

バンクシアガーデンで働いている人びとの中には、彼女 [ハナ] のような人は大勢いた。顔を未来に向ける新参者。それはひとつのタイプで必要なものだった。ところがラヴィは初めから、自分にとって共通するものが多いのは入居者の老人たちのほうではないかと思っていた。彼の人生においてもまた、きわめて重要なことはすでに起こっていたのだから。彼はもう疲れ果て、新しいことを始めようとは思わなかった。[...] アベベ、ハナ、タリクが一軒家に住むとき、ラヴィはまだ不安定な状態で漂っている訪問者に過ぎないということは、大いにありうることだと思った。デズモンド・パターノットを見よ。彼は人生の三分の二をこの地で過ごしていたが、まだ別の国に住んでいるのだ。(512)

ラヴィの選択に積極的側面を見出すのは難しいかもしれないが、彼が自らの意志で帰国を決断している点は見逃せない。妻を失ってからのラヴィは支援者の庇護下にあり、受け身に生きざるを得なかった¹¹⁾。ラヴィ自身も彼女らの善意を理解していたが、有力な彼女らの手にラヴィの人生の手綱が握られていたことも事実である。そんなラヴィが未来を選択する機会を得て明確な意思表示をしたのは、彼の主体性が回復しつつある兆しとも言えるのではないか。

一方でラヴィの決断を知った人たちは裏切られたという思いを抱く。たとえばラヴィの就職をお膳立てしたデイモは次のように感じる。

ラヴィが祖国に帰ることを知ってすぐにデイモは、疑心、怒り、傷心、落胆、喪失—言い換えると、拒みたくなる気持ちがあふれて息がつまりそうだった。サンルームでデイモは、兄弟たちやヘイゼルと一緒にテーブルを囲みソーセージを噛みながら、こうもらした。「それで、そういうことなんだろうね。文字通り命がけでこの国に入国しようとしている人たちがいるというのに、軽快な足取りでやってきて、国に帰ることにしたってことか？」しばらくのあいだ、ナイフの音だけが響いた。それからラスがT ボーンステーキにトマトソースをかけながら、やむなくこういった。「大学を出てから二年間もダブリンのパブでビールを注いでいたのは誰だったっけ？これとどう違うのかわからないな」ラスはいつもこんなふうにかたがた。まったく違うじゃないか、ワーキングホリデーと比較などできるはずもないのに。(598-99)

作者は兄弟の会話を介して不可視化された思い込みを炙り出している。デイモはみずからの特権的な自由を自覚しておらず、スリランカ移民であるラヴィと彼自身とのあいだに存在する圧倒的な格差を自明とみなしているのだ。ただし、デイモの独善性は決して特殊なものではなく、ごくありふれた心的態度でもある。ド・クレツァーは『旅の問いかけ』を執筆するにあたり、誰が旅をすることができるのか、それはなぜなのかという問題意識を抱いていた¹²⁾。旅は現代世界における権力の不均衡を示すバロメーターでもあるのだ。

ラヴィの選択を知った出版社の上司や同僚たちもデイモと同じような失望感を抱く。

ラヴィ・メンデイスは、タイラーが望んだとおりの役割を果たすことはなかった。ラヴィはいい奴なんだけど、適任者ではなかった。もしかして、彼は難民としても適任者ではなかったというべきなのかな？彼の仕事仲間たちはささやかな同情の花束を差し出して、ラヴィのこ

とを受け入れた。しかし彼らの頭の中で上映されていたのは、長くて危険な旅と鉄条網の映像だった。最初の総会の場で、自分のことについて何か話すように勧められ、ラヴィは介護施設での仕事について話をした。[...] ラヴィのほうに向けられた多くの同僚たちの表情は、[...] ラヴィが難民として経験してきた苦労について聞けることを期待していたのに、と言いたげだった。(559、強調原文)

ラヴィの上司であるタイラーは会社で生き残るためにラヴィを利用しようともくろみ、同僚たちはラヴィに苦難の物語を期待する。そんな彼らの姿勢は、他者に対する想像力の欠如を示している。

これまで見てきたように、ド・クレツァーが描く他者との出会いは、相互理解という共感しやすい物語に回収されることがない。むしろ多文化社会において相互理解が成立しない状況と、その背後にある心理を炙り出して問題化することに重点が置かれているのだ。問いを投げかけられた読者は足元を激しく揺さぶられ、いつしか私の物語として自分自身を見つめ直していることに気づくだろう。

結 び

本稿ではスリランカの歴史、とりわけイギリスによる植民地統治が現在に及ぼしている影響に注意を払いつつ、『旅の問いかけ』に登場するスリランカ移民の背景を明らかにしようと試みた。さらに、移民やホスト社会の構成員が抱えている境界線や他者に向けるまなざしを検証した。その結果、一人ひとりの移民の輪郭が浮かび上がると同時に、ホスト社会において移民の個別性が顧みられていない状況が明らかとなった。

グローバル化が進んだ現代社会では国境を越えた移動が日常化しているという言い回しをよく耳にするが、その実態がじつに多様であることを私たちは忘れがちである。それは私たちの想像力が及ばないからでもある。『旅の問いかけ』はたしかな手触りをともなって、世界は移動を余儀なくされている人々であふれていること、そして世界を自由に旅することが特権にほかならないことに気づかせてくれる。

多様な背景を持つ人々が同じ空間を共有して暮らす現代社会において、文化的他者との出会いは身近に存在する。しかしながら本作でド・クレツァーが描いてみせたように、歴史的・文化的経験を共有していない他者との差異を認め、深い次元で理解しあうのは容易ではない。他者とよりよく出会うための処方箋は無いのかもしれない。それでもフィクションの世界で他者との出会いを追体験するによって、他者への想像力を鍛えることはできるのではないだろうか。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22H00653 の助成を受けたものです。

注

- 1) 作者自身は本小説の構造について次のように語っている。“Ideas of connection and isolation run through the novel, which examines the human wish for connection to other people, and the difficulty of making or

maintaining it. The double narrative structure reflects this thematic interest on a formal level.”（『旅の問いかけ』出版記念講演、「今、世界で『旅』は何を意味するのか—移民、難民の時代をめぐる豪日作家の対話」、2022年6月3日）

- 2) Trapè 参照。同インタビューでド・クレツァーは海外に移住した理由について「言語の政治」を逃れるためだったと語っている。彼女はオランダ系バーガー人の家庭に生まれ、英語話者として育っている。
- 3) 伝統的なコスモポリタニズムが個々の共同体や国家への帰属を超えた世界市民を含意しているのに対し、1990年代以降提唱されてきた「新しいコスモポリタニズム」はローカルに根差した複数的あるいは多様な帰属の在り方を表す概念として用いられている。本稿におけるコスモポリタニズムは後者の意味で使用している。鈴木 2017 参照。
- 4) “Census of Population and Housing Sri Lanka 2012.” Department of Census & Statistics, Sri Lanka. <<http://www.statistics.gov.lk/pophousat/cph2011/pages/activities/Reports/SriLanka.pdf>>
- 5) Rodney Ferdinands によると、1921年にバーガー人の人口比率は1%未満だったにもかかわらず、行政職と専門職の18%を占めていたという（Ferdinands 54）。
- 6) 本稿におけるテキストからの引用には *Questions of Travel* の邦訳『旅の問いかけ』（現代企画室、2022）を使用する。必要に応じて一部改訳することがある。
- 7) カーメルは仏教徒を憐れみ、無宗教であるラヴィの妻を蔑んでいる。したがって、カーメルがキリスト教徒であることにも誇りを持っていることがわかる。
- 8) 1996年の国会答弁においてハワード首相は次のように発言している。“But could I also say that I profoundly reject with the same vigour what others have described, and I have adopted the description, as the black armband view of Australian history. I believe the balance sheet of Australian history is a very generous and benign one. I believe that, like any other nation, we have black marks upon our history but amongst the nations of the world we have a remarkably positive history. (Parliament of Australia, House of Representatives, Official Hansard for 30 October 1996.)
- 9) この政策を導入する引き金となったタンパ号事件は『旅の問いかけ』でも言及されている。2001年8月、ノルウェー船タンパ号が、座礁した木造船から435名のおもにアフガニスタン人の難民と5名の乗員を救助し、オーストラリア海域のクリスマス島へ向かおうとした。しかし、ハワード政権はタンパ号のオーストラリア領海への立ち入りを拒否し、救助された難民はナウル共和国に移送された。
- 10) オーストラリアバーガー協会のサイトに、イギリス統治時代に由来するバーガー姓の一覧が掲載されている。その中に Paternott 姓が含まれている。1956年にスリランカで公用語法が施行されてから多くのバーガー人が海外移住したが、渡航先としてもっとも多かったのがオーストラリアだったという。Bopage 参照。“Most [Burgher families] migrated to Australia because Australians had a lifestyle closer to theirs. Others moved to Canada, the UK and New Zealand.”
- 11) Chandani Lokuge は、ラヴィは内向的な人物として造形されていると述べているが、彼の内向性には利用できる資源と選択肢が限られていることによる自己効力感の欠如が大きく影響していると考えられる。
- 12) Alexandra Watkins のインタビューに対してド・クレツァーは次のように答えている。“I was thinking about who travels. And who doesn't travel. And why? What are the obstacles that are placed in the way of some people's travel? What are the reasons for which people leave home? And what are the different kinds of travel that exist in the world today?” (Watkins 573)

参考文献

- Bopage, Lionel. “About the Exodus of the Burgher Community of Sri Lanka,” Conference paper. Melbourne, December 2010.
<https://www.researchgate.net/publication/329999290_About_the_Exodus_of_the_Burgher_Community_of_Sri_Lanka>
- De Kretser, Michelle. *Questions of Travel*. Allen & Unwin: Crows Nest, NSW, 2012.
- Ferdinands, Rodney. “Proud & Prejudiced: the Story of the Burghers of Sri Lanka.” R. Ferdinands: Melbourne, 1995.
<<http://www.ferdinandus.com/Proudandprejudiced/P&P.pdf>>
- Gunew, Sneja. *Post-multicultural Writers as Neo-Cosmopolitan Mediators*. Anthem Press: London, 2017.
- Lokugé, Chandani. “Mediating Literary Borders: Sri Lankan Writing in Australia.” *Journal of Postcolonial Writing*, Vol. 52, No. 5, 2016, pp. 559-571.

- Rösel, Jacob. "Elites and Aristocracy in Colonial and Postcolonial Sri Lanka." *International Quarterly for Asian Studies*, Vol. 48, No. 1-2, 2017, pp. 15-32.
- Stanton, Katherine. *Cosmopolitan Fictions: Ethics, Politics, and Global Change in the Works of Kazuo Ishiguro, Michael Ondaatje, Jamaica Kincaid, and J. M. Coetzee*. Routledge: New York, 2006.
- Trapè, Roberta. "Broken Novels, Ruptured Worlds: A Conversation with Michelle de Kretser." *World Literature Today*, Summer, 2020.
<<https://www.worldliteraturetoday.org/2020/summer/broken-novels-ruptured-worlds-conversation-michelle-de-kretser-roberta-trape>>
- "Very Interesting Burgher Names," Burgher Association Australia.
<<https://burgherassocn.org.au/very-interesting-burgher-names/>>
- Watkins, Alexandra. "Tourists, Travellers, Refugees: An Interview with Michelle de Kretser." *Journal of Postcolonial Writing*, Vol. 52, No. 5, 2016, pp. 572-580.
- Wyndham, Susan. "The Interview: Michelle de Kretser." *Sydney Morning Herald*, 6 Oct. 2012.
<<https://www.smh.com.au/entertainment/books/the-interview-michelle-de-kretser-20121004-270bp.html>>
- 庄野護『スリランカ学の冒険』新版、南船北馬舎、2013.
- 鈴木弥香子「『根のあるコスモポリタニズム』へ」塩原良和、稲津秀樹編著『社会的分断を越境する：他者と出会いなおす想像力』青弓社、2017.
- 一、「ウルリッヒ・ベックのコスモポリタン理論の射程と限界—批判的継承に向けて」『現代社会学理論研究』2019年12月、32-44.
- ド・クレツァー, ミシェル『旅の問いかけ』有満保江・佐藤渉訳、現代企画室、2022.
- プリヤンタ ラタナーヤカ, B.M. 「スリランカにおける独立後の言語政策と教授言語の問題—国民統合の視点から—」『日本学習社会学会年報』6巻、2010：77-87.

(本学法学部教授)

Encountering the Other in Michelle de Kretser's *Questions of Travel*

by

Wataru Sato

The main motif of Michelle de Kretser's *Question of Travel* is travel in its broadest sense. The "travel" here refers to various kinds of human movement across borders including those of migrants and asylum seekers. The novel features a variety of travelers and questions the reasons for their departure, the psychology of immigrants and citizens in the host society, and their sense of belonging. In the sense that the story is set in various parts of the world and depicts diverse ways of belonging, it can be called a cosmopolitan novel, in which the protagonists' lives become connected to unexpected places and people. Reading this book is a lesson in cultivating a cosmopolitan imagination that transcends the national imagination that we are accustomed to.

This paper aims to recontextualize the immigrants' experiences in the novel and to reveal what is going on in the minds of both the immigrants and members of the host society when they encounter. The backgrounds of the Sri Lankan characters are not always clear. Therefore, this paper first reviews the ethnic composition and modern history of Sri Lanka, and then explores their backgrounds while keeping the sociohistorical context in mind. Then, it will focus on situations where the Sri Lankan immigrants and members of the host society meet, and look into the boundaries and prejudices that each holds against the other.